

I 学校の概要

個を活かす協働的な学びの推進モデル校事業

綾川町立滝宮小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
3学級 68名	2学級 65名	2学級 46名	2学級 67名	2学級 52名	2学級 55名	3学級 10名	16学級 363名

○教員数 25名

◆学校の特徴

滝宮校区は、教育に熱心な地域で、昨今、新しい住宅地が広がり、子どもの教育に関する多様化が見られ、基本的な生活習慣や学習習慣が定着できるよう個別最適化された学びが求められている。

本校の教育目標は、「よく遊び、よく学び、よく働く子どもの育成 一つながり 分かち合い 自立を育む」である。この教育目標を受け、一昨年度より、「話す力」「伝える力」「きく力」の3つの児童のコミュニケーション力に着目し、取り組みを進め、成果が現れ始めている。昨年度の児童自己評価では、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができている」と感じている割合が100%と高い結果となっており、全児童に「きくこと」の意識付けが図られるとともに、きこうとする意欲も高まっている。

II 研究主題等

研究主題 **つながり分かち合う喜びを通して 児童の自立を促す授業づくり（3年次）**
- 「きく力」の育成 -

◆研究主題設定の理由

主体的・創造的に生き抜くために、教育に求められているものは、「知」「徳」「体」のバランスがとれた「生きる力」を育むことである。中教審答申を受け、香川県教育委員会からは、「香川の新しい指導体制の在り方」の中で、「個を活かす協働的な学び」の重要性が示された。その実現に向け、「話す力」「伝える力」の重要性については、多くの学校で実感・研究実践を行っている。しかし、同じくらい重要なのが「きく力」であると考え。そこで3年間、「きく」→「きき方」→「伝え合い」とステップを踏み、「きく力」の研究を深めてきた。昨年度の県学習状況調査・児童質問紙において、「分からないことは先生や友達に質問して解決していますか」に対し、「している」の割合は増加したものの、「している」「どちらかといえばしている」を合わせた割合が、令和2年度より減少していたことから、主体的にきくことを通して、「きくことのよさ」や「わかる・できる」実感を十分に味わえていると言いはし難い。児童のきく技術を高めるとともに、きくことで主体的に課題解決ができることをめざして、本研究主題設定を継続し、児童の自立を促す授業づくりをさらに深めていきたいと考えた。

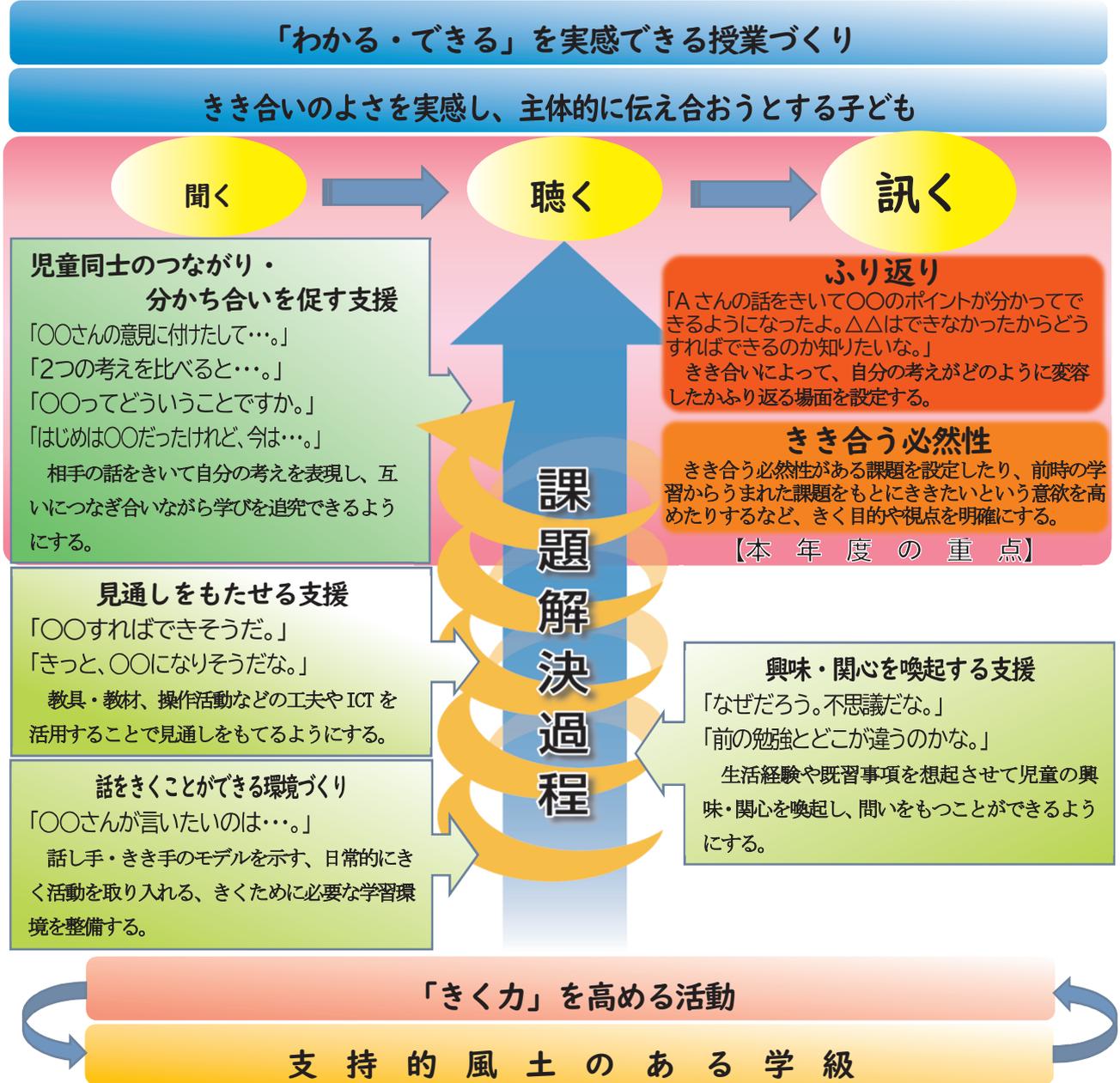
◆研究内容及び方法

(1) 研究仮説

きき合いを通して学んだことをふり返ることで、きき合いのよさを実感できるようにすることは、「きく力」を高め、「わかる・できる」を実感できる児童を育成することにつながるだろう。

学習指導において、「興味・関心を喚起する支援」「見通しをもたせる支援」「児童同士のつながり・分かち合いを促す支援」「話をきくことができる環境づくり」の4つの支援の充実を図る。特に「児童同士のつながり・分かち合いを促す支援」を核に、「きき合う必然性」を活動の中で生み出し、互いに「問いかけ」を行いながら学習を広げたり深めたりし、相互理解を深めたり、新たな考えを生み出したりする授業をめざしたい。学んだことをふり返る中で、新たな気付きやきき合う必然性が生じるような授業づくりを実践し、児童一人一人が「きくことのよさ」や「わかる・できる実感」を味わうことができるような教師の支援について探求する。

(2) 研究構想図



※ 3つの「きく」

聞く (hear) 一方向	聴く (listen) 半双方向	訊く (ask) 双方向
日常的に行っている一般的なきき方。意識していなくても、自分の関心ごとであればきくことができる。	話し手の真意(話の内容・気持ち)を正確に受け取ろうとするきき方(傾聴)。話し手との良好な人間関係を築くことができる。	質問や問いかけを行いながら深い意味や背景を探っていくきき方。話し手と能動的に関わることでより多くの情報を得ることができ相互理解が深まる。新たな考えを生み出すこともできる。

(3) 研究の進め方

低・中・高学年から構成する「学習指導三部会」を設置する。指導案検討や授業の準備・部会内での授業実践、指導案修正後、全体での事前検討(模擬授業形式)・研究授業・まとめを行う。部会全員で授業づくりを進め、深まりのある研究授業にするとともに、各学級の授業改善に生かす。授業討議では、きく力や理解などから抽出見を設定し、どのような「きく必然性」を活動に設定し、振り返ることが「きく力」を高め、児童が「わかる・できる」を実感することに有効であったか討議する。そして、その授業で見られた成果を次の研究授業に生かしたり、課題となったことを解決したりするよう、連続性のある実践を行うようにする。

Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取り組み

1 (校内児童アンケート) 友達の話を、質問を考えながら、一生懸命聞くことができますか。

指標 「①できている+②どちらかと言えばできている」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 児童が話をきくことができる環境づくりの工夫

児童が話をきくために必要な学習環境の整備として、全学級の全面掲示によりきき方を示したポスターを掲示したり、授業中の発言の話型を示したりした。どのような「きく」をめざすのか、全校生で共通の認識をして取り組むことが大切である。

他にも、児童の発達段階や教科の特性に合わせて、自信をもってきき合いに臨むことができるようなアイテムを使ったり、きき合う内容に関してより具体的に共通のイメージをもつことができるような資料コーナーを設けたりした。自分が安心して考えを話すことができると、友達はどう考えたのかききたくなる。また、友達の話している内容がイメージできると、自分と比べながらきくことができ、質問へとつながっていった。



(2) 児童に見通しをもたせる支援の工夫

課題の解決に向かって、「○○すればできそうだ。」「きっと○○になりそうだな。」と見通しをもつことができるように、教具や教材、操作活動などの工夫、ICTの活用などの支援を行った。

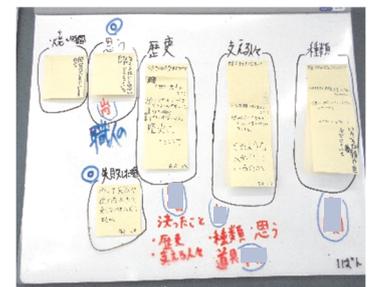
実践1 気持ちを考えるための表情マーク(第1学年 道徳科「親切・思いやり(はしの上のおおかみ)」)

おおかみがうさぎに親切な行動をした際に、おおかみが「どのような気持ちだったか」言語化することを急がず、ここではどのような表情をしていたか3つの表情マークの中から選ぶようにした。そうすることで、気持ちを考えることが苦手な児童でも、表情からおおかみの気持ちを考えることができ、さらに見ただけで自分と友達の選んだ表情マークの比較ができるため、ペアでのきき合いでは、互いが選んだ表情マークを伝えるだけでなく、なぜそう思ったのか、自分なりの言葉でスムーズに伝えることができていた。



実践2 目的を明確にした計画的なきき合う活動(第5学年 国語科「和の文化について調べよう」)

リーフレットに載せる観点を各班でまとめる際に、付箋とホワイトボードを使いながらきき合う活動を取り入れた。児童は、意欲的に調べ学習を行い、調べたことを整理して付箋に書くことで、自分の考えが明確になり、友達に分かりやすく伝えるための準備ができた。きき合う活動では、「観点をまとめる」という学習課題のもと、付箋を見ながら仲間分けをすることができた。何を使って、どのように学習課題を解決すればよいのかを理解して学習に臨んでいたため、グループでのきき合いがスムーズに進んだ。



2 (校内児童アンケート) 普段の授業では、学級の友達との間で、話し合う活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う+②どちらかと言えば思う」の合計



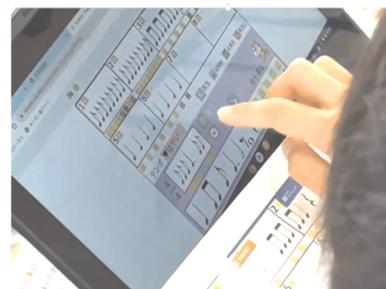
指標の達成に向けた実践

(1) 児童の興味・関心を喚起する支援の工夫

「なぜだろう。不思議だな。」「前の勉強とどこが違うのかな。」など、生活経験や既習事項を想起させて児童の興味・関心を喚起し、児童に問いをもたせることが、課題解決の意欲につながる。その際に、どのように一人一人に働きかけ、「気になる。やってみたい。」という気持ちを高めるのが大切だと考える。

実践 タブレット端末を活用した旋律づくり (第4学年 音楽科「音階をもとにして音楽をつくろう」)

音楽づくりを学習するにあたって、楽譜の読み書きに不安のある児童や、演奏技術的に難しさを抱える児童が見通しをもちながら主体的に学習に取り組むことができるようICTを効果的に活用した。タブレット端末上で4拍になるよう音符を組み合わせるリズムをつくり、次に音を選んだ。つくった旋律を再生すると音が流れすぐに確かめることができるので、何度も試しながら取り組むことができた。グループで8小節の音楽をつくっていく過程でも、意見をきき合いながらつくったらすぐに音で聴いて確かめ、また修正を重ねて聴いてを繰り返し、よりよい表現へと高めていこうとする意欲につながった。



(2) 児童同士のつながり・分かち合いを促す支援の工夫

友達の考えをきいて自分の考えを表現し、互いに「問いかけ」を行い、つなぎ合いながら学びを追求していく児童の姿をめざして、学習課題や活動の工夫を行った。

実践1 グループの仲間と解決したくなる単元構成・学習課題 (第3学年 体育科「走ってとんで」)

児童が「記録を伸ばしたい」という願いをもつように、単元の中盤と終盤にグループ対抗の大会を設定した。グループ対抗にすることで、同じグループの友達の課題をグループの課題として捉え、自分だけでなく友達の課題も解決しようと、自然と友達との対話が生まれると考えた。また、跳躍した長さではなく、最初の記録からの伸びを競うようにし、勝敗が運動能力に依存しない学習課題を設定することで、運動の苦手な児童もグループに貢献することができる、運動やきき合う活動に意欲的に取り組めた。



実践2 きく必要感をもったグループ交流 (第5学年 家庭科「物を生かして住みやすく」)

道具箱について各自の整理・整頓の実践を経て、友達の工夫をきき合う時間を設定した。グループの4人がそれぞれ違う相手の工夫をききに行き、その後各自がきいてきたことをグループできき合うワールドカフェ方式の活動を行うことで、一人一人が必要感をもってきき合いができるようにした。よい工夫をきき、グループの友達に伝えたいという思いから、自発的に質問する姿が見られた。



3（校内教員アンケート） 授業の中で、きく必然性のある活動を、意識して設定していますか。

指標 「①よくしている+②どちらかと言えばしている」の合計



指標の達成に向けた実践

「きき合う必然性」「ふり返り」に重点をおいて授業研究を行った校内研修

○ 6月 9日 第6学年 道徳科「自律的で責任ある行動（鬼の銀蔵）」



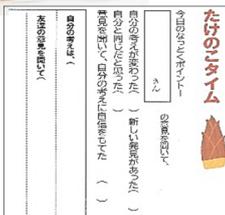
質問を考えたり、自分の考えと比較したりしながら、自分の考えを表現することを意識してきき合うことが難しい児童が多いという実態があった。そこで、クラゲチャートに自分の考えをまとめ、自分の考えと比べながら、その理由をきき合うことができるようにした。全体交流では、教師がクラゲチャートに整理し、視覚的に分かりやすくまとめていった。それを見たり、友達の考えをきいたりして、自分の考えとちがうのか、また、同じだけれど、自分と同じ理由なのかききたいという思いが高まり、積極的に質問する姿が見られ、規律ある行動の大切さについて考えを深めることができた。



○ 9月 21日 第3学年 国語科「人物に伝えたいことをまとめよう（サーカスのライオン）」



一人一人にきく必然性が生じるように、課題を焦点化し、選択できるようにした。第三場面について、中心人物じんごの気持ちの変化のきっかけとなった男の子の行動を、4つの叙述から一つ選択し、その理由をきき合う活動を行った。どれを選んだかネームプレートを活用し、板書と一致した4色の短冊に考えを書くようにした。そうすることで、きき合う活動の際、誰と交流するか視覚的に分かりやすくなり、自発的なきき合いにつながった。終末に設定した「たけのこタイム（ふり返り）」では、きき合うことのよさを実感できるようにするために、「友達の考えをきいて自分の考えが変わった」「新しい発見があった」「自分と同じだった」「自分の考えに自信をもてた」の4つの視点を示した。それによって、考えのよさや発見について友達から認められたことで、自信がもてたり、考えが同じ友達に聞いた児童が共感したりするなど、きき合ったことを共有する場となり、きき合うよさを実感することにつながった。



○ 10月 13日 第2学年 道徳科「規則の尊重（オレンジ色の木のみ）」



一人一人が自分の意見をもち、自信をもって発表することができるように、全体で役割演技→グループできき合い→全体で共有という学習活動を設定した。全体共有によって、友達の意見を参考に、自分の考えを深化したり、新たな気付きをもったりできるようにした。ふり返りでは、「〇〇さんの考えをきいてよかった」「自分の考えを言えた」「新しい発見があった」の3つの視点について数値で振り返ったり、これまでの自分を思い返し、これからの自分について文章で書いたりすることで、本時学んだことを今後にかしこくしていこうとする姿が見られた。



◆特徴的な取り組み

(1) 「きく力」を高める活動

朝の会や学級活動の時間を活用し、学習指導を支える児童の「きく力」を高める活動を実践した。「きき合う」ためには、疑問に思ったことを質問したり、答えたりと双方向に伝え合うことが大切である。そこで、「正確にきく」だけでなく「きき取った内容と自分の考えとを照らし合わせながらきき返す」ことまでを含め、きく力の素地ととらえ、きくことよさに気づき、新たな考えが生まれたり、相手の意図を分かろうとしたりするために、「きく力」を高める活動をより一層充実させた。

活動例1 なりきりインタビュー

想像を膨らませながらインタビューする力、インタビューをされたことに対し即興で答える力をつけるトークトレーニング。ペアになり、インタビューをする人とインタビューをされる人を決める。インタビューをされる人が1枚カードを引き「私は〇〇です。」と答える。インタビューする人は「もの」役の人に1分間インタビューし、された人は「もの」の気持ちを想像しながら即興で答える。児童は、普段何気なく使っている「もの」の視点に立って考えることで、その「もの」を想像し答えることの楽しさを味わった。

低学年は普段使っているものや教室にある身近なものになりきることでインタビューをする人の質問にも適切に答えることができた。学年が上がると、目の前にはないもの（目には見えていないもの）を想像した。回数を重ねることで、インタビューされる児童は、質問にあった答えを即興で答えるなど積極的に活動に取り組めた。

あなたは、どんな形をしていますか？
どんな気持ちで、毎日みんなを見ていますか？

わたしは、教室で飼われている「金魚」です。



活動例2 お絵かきトーク

分かりやすく伝える力、想像しながらきく力、質問を考えながらきく力をつけるトークトレーニング。グループになり最初の児童にのみイラストを渡し、渡された児童は自分の言葉でイラストの説明を始める。説明をきいた他の児童は「何のイラストだろう。」「ぼくが想像しているものと同じかな。」など正しくきき取るとともに、イメージを広げ、正解に近づくための質問をする。説明する時間を1分間に設定することで言葉を選び、分かりやすい説明を始める。説明を聞きながら絵に表す活動を通し、分かりやすく伝えたり、想像しながらきいたりするトレーニングとなった。学年に応じて、いろいろなアレンジも見られた。

第2学年では、外国語活動で学習した絵カード（ハロウィン）を活用し「お絵かきトーク」を実践した。学習した内容だったため児童は安心して活動に取り組めた。さらに、黒板に学習した英語の絵カードを貼っておくことで、視覚的に捉えながら質問したり、答えたりすることができた。



<その他、今年度取り組んだ「きく力」を高める活動の例>

- ・しりとりトーク（全員でしりとりをし、それを思い出し再話する）
- ・絵本トーク（読みきかせをきき、クイズに答えたり、どんなクイズが出るか予想したりする）
- ・推理トーク（裏返しに貼られた写真の物を、1人1つずつ質問をして予想する）
- ・1分間トーキング（相手の話をきちんときき、1分間会話を続ける）
- ・アドバイストーク（先生や物語の登場人物、歴史上の人物の悩みをきき、アドバイスを考える）
- ・真実のロゲーム（嘘か本当かを集中してきいて反応する）
- ・聖徳太子にチャレンジ（きき手に対して複数の話し手が一斉に発言し、それをきき取る）

(2) 1年生での少人数学級編成

第1学年では、25名以下の少人数学級での運営を行った。このことによって、ゆとりある学習環境の中で、一人一人の児童との関わりが深くなり、よりよく話をきこうとする姿勢の素地を育てるとともに、きめ細やかな指導を行うことにつながっている。

① 学級編成の状況

1クラスの児童数

(標準法による学級編成)

35名・36名



(加配活用による少人数学級編成)

23名・24名・24名

② 成果の概要

「きく力」の育成の視点から

1対1できき合うことを基本に、ペア学習の手引きとしてやり取りの仕方を視覚化した「ひでんのしょ」を使って、まず相手の考えをきくこと、きいたら「どうして」とたずねることを繰り返し練習するようになっていると、時間いっぱいやり取りを楽しみながらきき合う姿が見られるようになった。自分の考えに自信がもちにくい児童も、まず相手の考えをきくことで、安心して考えを伝えることができています。児童アンケートでは、「友達の話をきくとき、質問を考えながら一生懸命きくことができた」と感じている児童は86%、「ペアやグループでの話し合い活動に自分から積極的に参加できた」と感じている児童は75%だった。ペアでのやり取りを積み重ねることで、他者から学ぼうとする共感的な人間関係を育成することにつながっている。



また、きき合う活動のあと、友達の考えをきくことができたか、自分の考えを伝えることができたかについて顔のマークを塗ったり、分かったことやできるようになったことを短い文章で書き、発表したりして、学習を振り返る場を設定している。ペアでのやり取りのあと、ペアの友達の考えは、自分と似ていたか違っていったかを問い、互いの考えを確認するようにすることも、ふり返りにつながっている。また、書くときには、「〇〇さんの考えをきいて…」という書き出しを提示することで、書いて表現することができる児童が増えてきた。友達の考えのよさに気付き、異なる考えを活かした学び方を共有することができてきている。

学習指導においては、教師が児童一人一人を見取り、それぞれが自分の考えをもって友達と解決に向かって取り組むことができるように、学びがいのある課題を設定するなどの支援を行ったり、友達の考えを「知りたい」「きいてみたい」と感じられる場を意図的に設けたりすることで、きき合いが生まれ、個を活かす協働的な学びの充実に向かっていく。

児童の学校生活及び教職員の視点から

71名の児童について、3人の担任が機を捉えて児童の実態を情報交換し、学年全体や個別の支援について話し合うことで、児童にとって「段差」となることを軽減できた。7月の保護者アンケートでは、「お子様は『学校が楽しい』と感じていると思いますか。」という質問に対する肯定的な回答が93%を超えており、環境が変わったことからの不安や戸惑いをほとんど感じることなく、小学校生活をスタートさせることができたといえる。10月の学習参観後にも、「落ち着いた環境で過ごすことができています。」「一人一人に目が行き届いていると感じる。」「丁寧な関わりで安心できる。」との声が多数寄せられた。生活場面では、少人数であるからこそ、日直や給食などの当番活動では次々と順番が回り、友達の前に立って話したり、クラスのための仕事をして責任を果たしたりする経験を多くすることができる。毎日張り切って仕事をしている児童の姿が見られる。互いのよさに気付き、認め合いながら、協力することのできる集団づくりにもつながっている。

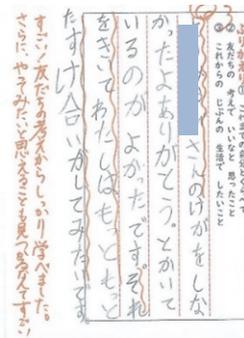
IV 研究の成果と課題

<成果>

○ 「児童同士のつながり・分かち合いを促す支援」に重点を置いて授業づくりを行った結果、3つの「きく」の中でも、質問や問いかけを行いながら深い意味や背景を探っていくきき方をする児童の姿が見られるようになってきた。教員も児童の発言時間を確保したり、教師の支援を意識して授業づくりを心がけるようになってきた。昨年度に引き続き、提案授業では、香川大学准教授の清水頭人先生にご指導をいただき、研究がより深まった。

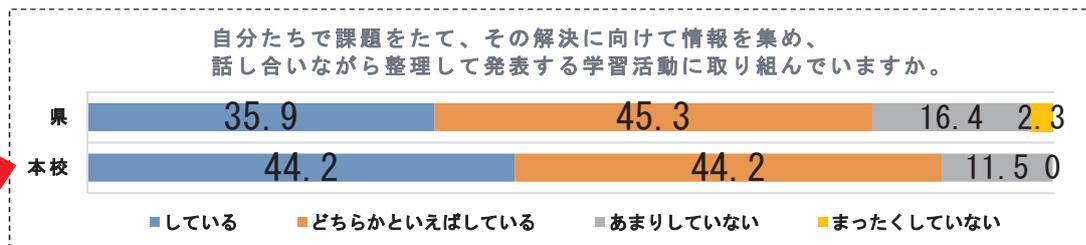
○ 学習過程にきき合いのよさを実感できる観点を示したふり返りを設定したことで、児童が本時にきき合ったことを価値付けることができた。さらに、多くの友達の考えをきき合うことで、自分と同じ考えの友達に出会う安心感、自分にはない考えをもつ友達の考えのよさに気付く発見、友達の考えと比較することで、自分の考えについて再考するなど、協働して学ぶよさへの気付きとなっている。

今年度の県学習状況調査・児童質問紙における協働的な学びに関する項目においても、県平均を上回る回答が得られた。



協働して学ぶよさへの気付き

「している」と
回答した割合
県平均 +7.3



○ 本研究において、支持的風土のある学級づくりを根底に掲げ、「きく姿勢」を徹底したことで、発言者を大切に思い、他者を尊敬しようとする気持ちをもって授業に参加することができるようになってきた。よいきき手がいることで、よい話し手になろうとする意欲が高まり、学級の雰囲気や方向性をより高め、つながったと考えられる。

<課題>

● 今後も、「きき合う必然性」を活動の中で生み出し、児童が「問いかけ」を行いながら学習を広げたり深めたりし、相互理解を深めたり新たな考えを生み出したりする授業をめざしたい。そのためには、本時で何を学ぶか課題を明確にしていくことが大切である。

● 「きき合い」の中で、児童が立ち止まって考え深く学習課題を追究することが求められる。そのためには、児童同士の質問の質を上げることが課題である。ただ単に問い返しを行うだけでなく、共感的な考えを引き出す、批判的な考えを引き出す、模範的な考えを引き出す、感動的な思いを引き出す、体験的な思いや考えを引き出す、過去や未来への思いを引き出す等、きき合いで深めたい観点を明確にし、意識しながら意図的に問い返し、授業づくりをおこなうことが課題である。

● 学習活動をふり返る中で、新たな気付きやきき合う必然性が生じるような授業づくりを実践し、児童一人一人が「わかる・できる実感」を大いに味わうことができるような教師の支援について探求したい。そのために、何を、どうふり返らせるか今後も追究していきたい。

問い返しの質の向上

ふり返りの深化

「わかる・できる」を実感